

---

IL

月山 耀真

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IL

### 【Nコード】

N5345V

### 【作者名】

月山 耀真

### 【あらすじ】

壁の中に閉じこもった人間「人類」、壁の外に追い出され超能力を得た人間「イル」

人類が「領地奪還」を名目にイル撲滅計画を実行する。  
主人公ユーイチ、その仲間がこの世界で生き抜く物語。

## prelude 1 - 1 (前書き)

はじめまして。私、月山 耀真です。

この度、この「小説家になろう」という素晴らしい投稿サイトを見つけてまして、愚作ながら投稿させていただきました。

この作品は、私の趣味の一環として作成したものです。多くの読者様に楽しんでいただければ幸いです。

## prelude 1 - 1

IL

俺が突っ立っている所はもと大都市が広がっていた。名前は横浜っていうらしい。今は廃れ、ただ瓦礫とゴミ屑が広がるだけの廃墟都市になっている。

俺自身、どうしてこうなったかは分からない。ただ、朝に目覚めたみたいに意識が戻って、気づいたらこうなっていた。

俺は勝手に世の中から隔絶されたって思っていた。でもどうやら違うらしい。此処みたいな所はいっぱいある。

今日も、嫌なほど青空が広がっている。綺麗だ。でも足元や水平線を見るとやっぱり殺風景、ゴミだらけ。

こんな生活を、俺は3ヶ月続けていた。

でも、いきなり奴は現れた。

そいつは元凶？それとも…

あの時の俺には、どっちだか分からなかった。

いきなり、俺が闇に包まれたのはいつだったのだろうか？

宇宙空間に漂っているような感じで、ただ寒かった。死んだのかと思った。本当に苦しくって、淋しくって。でも涙も出なくて。

ただ、人と話したかった。誰でも良い。殺人鬼でも誘拐犯でも。本当に長い夢だった。

そして、気がついて目が覚めたら、いつもと全てが変わっていた。場所、人、時間まで。自分のこと以外何から何まで。もしかしたら好きな人まで。

怖かった

でもすぐに慣れた。俺は一人で寝床を作って、一人でメシを探した。もう自分以外は何物でもない。ただの物質だ。

そう思っていたら、案外生活は楽で、気ままで、悪くなかった。

普段どおりに起きる。朝の6時。畳で作ったベッドから起きて、いつもの色あせたジーンパンと昨日拾ったワイシャツに着替えた。

「……」

食料置き場の飲み水がまた無くなっている。やられた……。今回で三回目だ。仕方が無いこと。いま、誰もが飲み水を探し求めている。こんな状況で犯人が分かる訳も無いので、犯人探しも時間の無駄だ。

バッグを背負って、階段を降りた。これでもここは三階。

外はまだ暗い。でも仄かに水平線が明るくなっているのは分かる。今日もこの調子だと晴れる。そう感じた。

8時に集会がある。自分ユーイチを含めて3人のグループで、一緒に食料を探している。彼らとは数日前に知り合ったが、なかなか面白くって良いやつらだ。

近くの塀に立て掛けてあるバイクにまたがった。免許を持っているけど、こんな荒れ果てた道だったら関係ない。俺は自由だ。

ボロボロのバイクを唸らせる。久しぶりにエンジンは快調だ。後ろにバックをロープで括り付けた。

道はやっぱりガタガタ。握るハンドルに振動が伝わる。正面からの風は冷たく、鋭い。

たまに、落ちている瓦礫なんかに躓くこともある。でも人はたまにしか歩いてないし、事故るとしたら、被害者は自分自身だから気が軽い。

寝床のビルがどんどん遠ざかる。でも多分迷わない。だってあそこは俺の家だ。周りは廃墟で、あのビルも廃墟だったとしても、あそこだけは特別だ。

右側に川が見える。廃墟とは対照的に日光を浴びてきらきら光っている。汚れた水を汲む人、魚を釣っている人、何人もいた。

太陽が姿を現した。やっぱり青空。  
上を見ながら、バイクを走らせる。

ああ、気持ちがいい。

気ままに運転をしながら、時には風景を眺めたりして楽しんだ。  
まだ集合時間まで結構ある。こんな感じで時間を潰すのも悪くない。  
しばらく走っていると、後ろの荷物がずれてきたので、バイクを  
止めた。十字路の真ん中で止まって、スタンドをかける。

ロープが解けている。これがタイヤに巻き込まれると危険だ。今  
度はバッグの形が変わるぐらいきつく縛った。

手がなんだかダルイ。つま先立ちして体を空に向かって伸ばす。

「くわあああ」

腹の底から声が出た。

## prelude 1 - 1 (後書き)

さて、ここまで読んでくださった読者様へ。

どうでしょうか？まだ起伏のない前奏曲のような内容になってしまいました。

初めての投稿になりました、必要のない心配をしております。すぐに慣れれば、と思うばかりです。

プロフィールに記載されていると思いますが、私はまだ学生です。定期考査や用事が重なることが多く、連載が途切れることもあるかも知れません。ご了承ください。

次回も、自分を含め皆様が楽しめる小説を投稿できれば、と思います。

月山 耀真

p r e l u d e 1 - 2

雲ひとつない。

「なあ、にいちやん・・・。」

伸びている途中に、突然声を掛けられたのでビックリした。振り返ってみるとバイクにまたがった毛むくじやらなオッサンが、無表情でこちらを見つめていた。

「はあ、なんでしよう??。」

「そいつは、あんたの?。」

オッサンは、俺のバイクを指差している。

「たぶん・・・。」

「たぶん??。」

実は、あのバイクは目が覚めた時に近くにあっただけで、自分のものでは無かった。

「違います。俺のじゃありません。」

「ふゝん」

「何か、用ですか?。」

「いや、違うよ…。ただ何か誰も元気そうな奴がいねえからよ…。」

「俺が元気そうだった?。」

「そういうこと。いいバイクじゃねえか。」

白い歯で、ニヤツと笑うとオッサンはタバコを吸い始めた。俺はどこから来たのか、何しに来たのかを尋ねたが、オッサンは「しらねえ」「わかんねえ」と言うばかり。

「なんで、そんな事聞くんだけ?。」

オッサンはバイクから降りて、地面に転がっている角材に腰を下ろした。俺もバイクのスタンドをかけて、地べたに座った。

「何でだろう?俺も自分のことがわかんねえ。突然こんなふうになつて。」

「突然??。」



オッサンは初めて表情を変えた。なんだか驚いている様子だ。

「そう、突然……。何もかもが変わってしまった。町もこんな廃墟だらけじゃなかったのに。」

「……」

「俺らが寝ている間に、何があっただか……」

青い空を仰ぎながら、呟いた。考えても無駄なことなのに……

「いったい何のことだ？」

オッサンが口を開いた。明らかにさっきまでのふざけた感じとは違う。

「??」

なぜ？この人は知らないんだ？考えにふける。

「どういう事だ!？」

襲い掛かるように聞いてきたので、あせって答えた。

「何のことだか、こっちが知りたいよ……」

「……」

オッサンは何だか、深く考え込んでいるようだった。ずいぶん長く、20分ぐらいしてようやく元に戻った。

「どうしたの？」

「いやいや、考え物。でももう大丈夫。」

不精髭を掻きながら、作り笑いをうかべる。

「はぁ……」

いきなりオッサンは立ち上がって、俺を見下げた。顔面は影になって見えなかったが、こっちを向いて言っているのは確かだ。

「お前、仲間はあるか？」

タバコを足元に落とし、踏みにじる。タバコの香りが鼻をくすぐった。

「はい、二名だけです……」

咽ながら答える。

「よし。そいつらにも合わせろ。」

声は相変わらずのふざけ調子だったが、顔が真剣だったので、俺

は断らなれかった。でも理由が気になった。なぜ？

正直、信用できそうにない。

「お前らに伝えることがある。」

心で思っていたことの回答をされてしまったので、焦りを笑いでごまかした。

「でも…」

完全に鎮火したタバコを見つめながら、言った。

「大丈夫。お前たちに損になるような事はしないさ。」

オッサンはバイクに乗ると、張り切った声で叫んだ。

「よし、行くぞ」

「でも、場所知らないでしょ…」

前方で張り切っているオッサンを牽制して、前に出て言った。

「じゃあ、こっちです。」

エンジンは、二台とも好調だ。唸りを上げて走り出す。

## prelude 1 - 2 (後書き)

こんにちは、月山輝真です。

昨日に続きまして、最新作を投稿いたします。

まだまだ話は序盤です。仲間である人々と会っていなければ、このオッサンの名前も未発表です。

まだまだ盛り上がりには欠けますが、徐々にテンションを上げていきたいな、と思っています。

いつも集まっている場所は、そんなに遠くない所にあるトンネル。オッサンを連れて、やっと着いた。集合時間ギリギリ。

「あんたが、あんな所で一服するからこんなに時間が掛かったんだから！」

「仕方ないだろ。俺は禁断症状になるとヤバイの。」

「じゃあ、タバコなんてやめろよ！」

「いや、無理無理……。」

トンネルの入り口にバイクを立てかけながら、口げんかしていた。なんだか楽しかったような気がする。

トンネルの中は涼しい。隣にいるオッサンは嬉しそうに前を歩いていた。俺は何度か来た場所なので、緊張もしなかった。

奥のほうで、明かりが見える。あれだ。

人が向かってくるのも見える。メンバーの中の誰かなんだろうけれど。どうも見たことがないような感じがする。

「あの……」

影が喋りだした。こんな声は聞いたことがない。俺は足を止めて。オッサンにも合図を送った。オッサンは気がついたらしく、じっとしている。

「何？」

「あなたユーイチさんですよね？」

なんで、俺の名前を……言葉にはならなかった。

「だから、なに？」

「奥であと二人が待っています。ついてきてください。」

オッサンのほうを見ると、「大丈夫」のサインを出している。俺は影について行った。

明かりが点いている所には、小さな小屋が作られていた。こんな物は前に来たときには無かった。

錆だらけのドアを開けると、見慣れた仲間たちがそこにいた。  
「あーっ！！ユーイチだ。」

最初に叫んだのは、廃墟の中で知り合ったメグミ。

「やあ、おそかったね・・・。」

これは、このトンネルの中で出会ったシュンヤ

「道が混んで・・・。」

挨拶代わりに軽い冗談を言った。シュンヤは敏感に反応して突っ込みを入れてくれた。

「バカ！あんな道が混んでる訳無いだろ。」

「でした・・・。」

奥で、誰かこじんまりとしている女子がいる。多分さっき驚かせてくれた奴。俺のほうから声をかけた。

「あんた、名前は？」

女子は小さい顔をこっちに向けて、ハキハキとした声で話した。

「レイと言います。さっきはビックリさせてすみません。」

「いや、いいよ。大丈夫。ユーイチです。よろしく。」

後ろで足を組んでオッサンが居眠りをし始めた。自己紹介もしないで寝るな！肘で突いて起こした。

「おい、オッサン、自己紹介しろ！」

「へえ、なんでえ？」

「当たり前だろ、常識として・・・。」

「わかったよお。」

全員が、注目した。オッサンはフラフラッと立ち上がって大欠伸。そして腰に手を当てて喋った。

「えーっと、オジサンです。」

「……………」

「あーっと、バイク持ってます。」

「……………」

「悪い人ではありません。多分良い人です。タバコ吸います。自分。」

「……」

見かねて耳元でアドバイスをした。

「おい、オッサン。名前とか、どこから来たか言わないと。」

「なるほどお。」

「頼むぜ、オッサン」

ゆつくりと座って、耳を澄ます。

「え〜っと俺の名前はつと。たしかゴローです。出身地はどうしても言えません。」

なぜだか分からないけど、拍手が起こった。俺も合わせて手を叩く。オッサンはなんだか嬉しそうにしていた。照れて、顔が赤くなっている。この人にもいろいろな表情があるんだなって、当たり前なことを再認識した。

シユンヤが大きなノートを広げて、机の上においた。そこには今まで行ったことのある場所のデータが詳しく記されていた。

「うん??」

オッサンがノートを見ながら首を傾げている。

「どうかしましたか?」

レイはオッサンの異変に気がついたようだ。優しい声で、オッサンに訊いた。

オッサンは肘をついて、口を曲げている。

「いやあ、お前らつてこの辺の住民なんだろ。何でこつやって書かなきゃいけないんだ?」

「えっ? どういうこと?」

今度はメグミ

「だから、いちいち書かなきゃ覚えられねーの? 地元だろ?」

「わかんねーんだよ。俺ら。ここが地元かどうかすら。」

オッサンの後ろで、小声で言った。

「オッサン。覚えてるだろ。俺らはもう思い出したくねえ。あの闇を。」

「闇?」

「そうだよ。あの闇、眠りのせいで何もかも忘れちゃった。時は流れ、自分自身以外の物は全部変わっちゃった。」

「なんの…なんの事だ??さっきからお前…」

部屋の中は一瞬にして、静かになった。もしかして、このオッサンは何も知らないのか?俺含め、ここの皆がそう思っただろう。

シユンヤがペンを離さずに訊いた。

「あなたは、なにも知らないのですか?」

「ああ、知らん。」

「なぜ?」

「わかんねえよ。」

「ここ数年、どこにいましたか?」

「…言えねえって言っただろ。」

皆がじつと見ているので、このオッサンもシラをきれなかったのだろう。さつきまで黙っていたことを、おとなしく話した。

「と、東京」

「東京!?!?!」

全員が叫んだ。

東京、俺らの中では唯一、法律が存在し、綺麗に整備された町があるという噂。できる事なら行ってみたい場所でもある。

「そう、東京。今は東京国になってるけど…」

「じゃあ、東京国の中は、こんな廃墟だらけじゃないの?」

「当たり前だ。高速鉄道がはしり。高層ビルが立ち並ぶ。東京が新文明を独り占めにしているんだろ。」

俺は、ひとつ疑問に思った。なぜ東京にいたオッサンはあの恐ろしい体験をしていないのだろう。それに東京だけが国として自立し、文明や法律を守れているのはなぜなんだろ?

「東京国に住んでいる奴らは、“外の世界”のお前らを「イル」と呼んでいる。英語で病気っていう意味だ。」

オッサンは、悲しそうに話した。

「話したくねえが、いずれ分かるんだ。教えてやるよ。」

机の上にオッサンが腰掛けて、世間話をするように遠い目で話した。

「東京や名古屋、大阪、神戸、札幌、仙台、福岡。日本の主要都市は全部そうしている。これらは小さな国になって暮らしている。それぞれの町には地下主要道路じゃないと決して行き来できない。町の周りには「アパルト・ウォール」って言うでかい壁に包まれているんだ。」

レイが腕に顔を乗せながら訊いた。

「じゃあ、ゴローさんはどうやって出てきたの？」

「頑張つて…出てきた…。」

休ませまいと、メグミが尋ねる。

「なんで？東京国の中のほうが暮らしやすいでしょ。なんで出てきたの？」

「理由かあ…。情けなくつていえねえ…。」

オッサンは低い声で、一人で笑っていた。でも俺には悲しくつて、悔しくて泣いているように見えた。

何も言えなかった。俺以外の奴らは何かしら人生の目的を持っている。それに比べて俺はただ生きているだけ。

メグミはあんな感じでも、自分の本当の親を探す目的がある。

シュンヤはうつすらと覚えている親友との再会が目的だと以前聞いた。

レイは、あいつには何かあるのだろうか？もしかして、俺と同じような今を感じているんじゃないのか？

「まあ、まだ俺らには知ってもどうにもなんねえ。」

シュンヤが話を切り出した。

「まあ、そうかもしれない。」

とオッサン。

「おい、ユーイチ。お前ここに泊まれ。ずっと。」

シュンヤが思いついたかのように、提案してきた。

「えっ??？」



俺には家がある、別に愛着がある家ではないが……。でもオッサンもいることだし、ここにいるほうが心強いかも。

「いいの??」

分かりきっていたけど、嬉しさと、躊躇いから抜け出した勢いで訊いた。

「いいに決まっているじゃん」

メグミが満点の笑顔で、答えた。レイも嬉しそうにメグミの後ろで頷いていた。久しぶりに嬉しかった。いつも一人だった俺に、本当の仲間ができたんだ。

オッサンにもそう言っていると、嬉しさのあまりか、小屋から飛び出して道の真ん中で踊り始めた。みんなそれを見てクスクスと笑っていた。

久しぶりに暖かいひと時だった。

### prelude 1 - 3 (後書き)

仲間がやっと出てきた3話目です。

同じ日に2回の投稿になりました。

いかがでしょうか。

「prelude」とは、英語、フランス語で前奏曲を意味します。

まだ、物語の序盤ということを伝えなかったのです。

それでは、また。

月山 輝真

俺は荷物を取りに行くため、家としている廃墟に帰るために、バイクにまたがった。トンネルの中では分からなかったが、もう日は落ちて暗い。でもまだライトを点ける程ではない。

バイクにキーを挿して、エンジンを掛けた。持ってきたバッグは小屋の中に置いてきたので軽快に走れそうだ。

「おゝい」

オッサンの声だ。

「なに〜？」

走ってきたので、オッサンは苦しそうに肩で息をしていた。右手には、バイクのキー。ついてくるつもりだとすぐに分かった。

「おれも行く。」

「そう言うと思ったよ……」

いそいそとバイクにまたがっているオッサンを見守りながら、俺はエンジンを唸らせた。早くこいよ、の合図。

「せかすなよ」

後ろから、ゆっくりとオッサンはやってきた。

「じゃ、行くよ。」

「せっかちは、もてねえぞ！」

「余計なお世話だ。」

ハンドルを思いっきり捻った。夜のドライブは人生で初めてだ。

ヘルメットをかぶってないので、風がもろに顔に当たる。涼しくて気持ちいいけど、たまに虫なんか当たって痛い。

すぐに回りは暗くなった。ライトを点ける。

夜は道がよく見えないから、昼間ほどは飛ばせない。20キロぐらいでゆっくり走った。

オッサンのバイクが並行してきた。

「夜は余計なこと考えないで走れるからいいな…。」

真っ直ぐ前を見ていたので、オッサンの表情は分からなかったけど、多分、いつも通りにニヤニヤしているんだろう。

嫌になるほど日光を発していた太陽は、いつの間にか水平線に沈みこみ、変わりに冷め切った表情の三日月が空を支配していた。

「さっきの話だが…」

オッサンが珍しく、真っ直ぐを見つめながら運転している。でも今の声は間違いなくオッサンだ。

「何？」

「やっぱり、お前だけに言っておくわ。」

川を沿うように、2台のバイクは走っている。その他、地上に光るものはない。俺は、ただハンドルから伝わる振動、風を感じながら、耳を澄ました。

「何のことについて？」

「ちよつと、機密事項。」

「ふーん…」

「お前んちで話そう。」

トンネルから出発して、けっこうかかった。俺の家は、引越したると暗い表情で俺たちを迎えた。バイクを止め、階段を上る。

「こつち、ここの3階。」

ペンライトでかざして、オッサンを案内する。オッサンは物珍しそうに、キョロキョロ辺りを見回りながらついてきた。

「お前、3階に住んでんのか？金持ち思想だな〜。」

「うるさい、うるさい。俺は高いところが好きなの。」

ドアを開けて、オッサンを部屋に入れた。あとから入って、南京錠を閉めた。ここらへんには、水泥棒や食料泥棒がけっこういるから用心が必要だ。

「結構、神経質？？」

ベッドでくつろぎながら、オッサンが聞いてきた。俺はお気に入りの上着を着ながら応えた。

「いや、たいして。」

大きいバッグの中に、自分の必要なものをつめている途中、オッサンが喋りだした。俺は聞きながら、作業を進めた。

「さっき、話すって言ったことだけど…」

「なに？」

「真面目なはなし、これが一番お前たちに伝えたいこと。」

「話してみてよ。」

「イルは、人類ではない。」

瞬間的に自分の手が、石になったみたいに止まった。自分の神経が全部麻痺して、体が動かなかった。

信じられない。

何言ってたんだ、オッサン。

………

嘘だろ。

でも、そうかも。

あの闇のせいかな？

嘘だ。

違う

認める！

………

「おい！！ユーイチ、大丈夫かな？」

オッサンの顔がいつの間にか目の前に来ていた。驚いて、叫んでしまった。

「おちつけ、ユーイチ。」

手の震えが治まらなかった。

「オッサン…」

「なんだ？」

こんな心配そうなオッサンの顔は始めて見た。でも、俺は言いたいことは、しっかりと言う主義だ。

「こういう事は、突然言わないでくれ…」

「そうだったな。ごめん」

笑いがこみ上げてきた。命一杯笑った。夜のあの水平線まで届くぐらい大声で。オッサンも笑っている。

面白いよ。

本当に面白い。

「あんたが、本気で言ってたんだから、これは本当だな。」

「そうだって言ってたんだろ。」

二人とも笑いながら、話した。

「は〜」。笑い疲れた。落ち着いた??？」

「おかげさまで…」

オッサンは安心したのか頷いて、またベッドに寝転がった。俺は手を止めて落ち着いて話を聞いた。手を差し出して、「続きをお願いします」の意志表示をした。

「じゃあ、続きを。イルは人間じゃないんだ。」

「人間じゃ、無い?」

「そうだ。もう人類ではない。手遅れだ。」

「手遅れ?じゃあ、もともとは人類だった?」

「そう、俺の予想では89年前までは…。多分、君たちイルは、つまりアパルト・ウォールの外側にいた人類はみんな同じだ。」

俺は、大きいバッグを枕代わりにして寝転びながら黙って聞いた。

「イルとは、言い方を変えれば、DNA螺旋のうち12本すべてが機能している者を指すのだ。人類は12本のうち2本しか機能していない。180年前にフォトン・ウェイブと呼ばれる宇宙線が地球に降り注いだらしい。その当時、フォトン・ウェイブを浴びた者は絶命すると言われていたそうだ。だから政府は急ピッチで主要都市だけ救う「ラブチャーシティ計画」を打ち出した。」

天井に移る影が、だんだん変形していく。俺はそんなことにすら気が付かないほど集中して話を聞いた。

オッサンも時々姿勢を変えたりしながら、結構リラックスしている。「つまり、フォトン・ウェイブでイルが誕生し、主要都市だけが影

響をうけずに人類から変化しなかった。だとしたらアパルト・ウオルの外は、政府に見捨てられた…？」

オッサンは残念そうに、静かに頷いた。

「おそろく。」

「オッサンは、人類？イル？」

「俺は、東京にいた訳だから人類だ。だから、多分お前たちのほうが年上って事になるな。」

「俺らは、200年近く生きているの？」

「多分な。理屈ではそうなる。」

「ふん」

「さて、問題点を話そう…。」

オッサンが起き上がった。さっきの語調と少し違って、なんだか雰囲気も違う。俺も起き上がった。

「単刀直入に言くと、人類はイルを有害生物と考えている。」

「なっ、なんで！！？」

「分からん。俺ら人類は、壁の外は地獄だって教わってきたからな。イルが目覚めたのが最近、大体1年たつぐらいだ。そろそろ人類が壁を越えて、領土奪回をスローガンに攻めて来るってことだ。」

「な、なんで。俺らも元は人類なのに…」

「大体、現生人類は運命から目を背けた臆病者集団だ。自分たち以外、何も認めない。すべて有害とみなしてしまうんだ。だから、壁の外を自分たちから隔絶した。」

「でも、戦ったとしても、人類は勝てないんじゃない。小さな国ひとつが敵なら。」

「いや、すでに地下にトンネルが開通し、地下都市も出来ていれば、そこから海、空、宇宙どこにでも行ける地下港まである。それぞれ、すべての世界中の都市が繋がったのが10年前。彼らはいつでも攻める気まんまんだろっ。」

風が干切れたカーテンを揺らした。

「オッサンは人類でしょ。どうやってここまで。」

「俺は地下鉄道の廃トンネルを使ってここまで来た。旧文明、つまりフォトン・ウェイブが襲来する前の時代には、ここも結構発展した町だったそうだ。おかげでたくさん地下道があったから、行き来自由って訳。この辺は横浜って呼ばれていて日本国が始めて本格的に外交した町だったそうだ。地下に残っている旧文明の資料にそう書いてあった。」

オッサンはバッグから埃まみれの本を取り出して、こっちに投げた。本には「横浜開港170週記念」と書いてある。当時の町並みは、高層ビルが並び、競技場、人工島、無駄に長い釣り橋が写真で載っている。どれもこれも、新鮮で輝かしい。

オッサンに本を投げ返して、今度はこっちが聞きたいことを尋ねた。「壁から出た理由は？」

「さつき恥ずかしくって言えねえって言っただろ。」

「ここまでできたら言えよ。」

「…俺が外の世界に興味を持ったのは、小さいころからだった。学校では外の世界は危険だ、って教えてもらっていても、俺はこんな狭い閉ざされた世界から出たかったんだなあ。どんなに残酷であってもいい、どんなに寂しくてもいい。そう思っていた。

で、恥ずかしい事だが、ついこの間、仕事クビになって出てきたって訳。」

「へー。やっぱり適当な理由だ。」

「笑えよ…」

「なんの仕事だった？」

「警察」

「へえ、あんたが警察かあ・・・」

「特殊部隊だった。生物災害緊急派遣部隊、通称BHD Mの一員」  
「何の仕事だったの？」

「生物災害を抑えるための部隊。生物災害といえば対象は主にイルになっている。」

「えっ!？」



「B H D Mのミッションはイルを撲滅すること。領土を広げるために壁の外に出られるって理由だけで、俺は志願した。」

「じゃあ、あんたは!!!」

「いや、俺がB H D Mにいた頃には、イルが少数しか目覚めていなかったから他のミッションがあった。最近になってイル撲滅部隊が編成されたって話だ。」

「そうか、良かった。」

「でも、人類は絶対に侵入してくるぞ。」

「うん、わかっている。いつかはね……」

俺は立ち上がって、中止していた引越し準備を再開した。思っていたほど荷物は多くなく、大きなバッグはまだブカブカだ。ほとんどが、衣食品、思い出の品などサングラスとジャケットの他に無い。

ひびの入った鏡の前で、身なりを整え最後に、拾ったサングラスを頭に挿した。

「どう??」

オッサンは拍手をして喜んだ。

「ハハハ、映画の主人公みたいだ。アクション映画の。」

「じゃあ、そろそろ行こう。」

重たくなったバッグを背負って、ドアを思いっきり蹴り開けた。蝶番は吹っ飛び、ドアは外れ、階段を転げ落ちた。

「おゝ、かつこいゝ」

オッサンが目を点にしながら、妙なお世辞を言い始めた。うれしかったので素直に受け止めた。

バイクにまたがって、叫んだ。

「さあ、出発だ!!!」

俺たちは夜風のごとく、闇夜をバイクで疾走した。

## c o n f e s s i o n 1 - 1 (後書き)

改行などが、最近いいかげんになってきてしまいました。

オッサンの告白によって、イル発生の原因が見えてきました。そして自分でも驚いているのがユーイチとオッサンの会話が、上下関係が消えた感じになってきたことです。

こんな感じで、自然に文体が変わっていくのが、楽しみでもあり恐ろしくも感じています。

月山 耀真

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5345v/>

---

IL

2011年10月9日13時01分発行